

(33)

氏名(生年月日)	コ ジョウ ケイ ミ 古 城 慶 子
本 籍	
学位の種類	博士(医学)
学位授与の番号	乙第 2175 号
学位授与の日付	平成 14 年 10 月 18 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当(博士の学位論文提出者)
学位論文題目	構造力動論の精神病理学総論への寄与 第 2 部 構造力動論からみた精神分裂症候群の諸水準—診断学的, 症状学的そして精神病理学的水準での精神分裂病—
論文審査委員	(主査) 教授 田中 朱美 (副査) 教授 岩田 誠, 川上 順子

論 文 内 容 の 要 旨

〔目的〕

本論では精神分裂病問題を解明するために、次の 2 点を目的とした。①際限のない拡大解釈によって妥当性を失ってしまった精神分裂病概念そのものの提起している意味を、Janzarik の構造力動論によって疾病学、症状学、精神病理学の 3 水準で規定すること、②構造力動論は内因性精神病の臨床に対応できる精神病理学的方法論であるのか、症例に照らして吟味することである。

〔対象と方法〕

第 1 点は Janzarik の構想力動論の基礎概念から演繹した。第 2 点については 44 年経過の内因性精神病の自験の 1 例を対象として検討した。経過の記述は力動面(感情-推進面)と妄想系列(妄想症状の構成から評価される病像)との二元を用いた。構造力動論を用いて病像-経過的視点から両次元の関係を構造分析した。

〔結果〕

1. 内因性精神病単一論の立場にある構造力動論的構想では、疾病学的水準での精神分裂病に相当する概念はない。しかし、自律化した「力動の逸脱」の一型である「力動の不安定」が内因性精神病の精神分裂症候群の疾病論的動的階段の基本布置であった。また症状学的水準での精神分裂症候群とは「構造の自立化」であり、その前提に精神病理学的水準での構造の機能的ないしは恒常的崩壊と構造全体に担われている力動の頭勢抑止機能の脆弱性があった。

2. 対象例での妄想系列の経過変遷に照応したのは、症状学的水準での力動面優位の症状構成(感情病症候群)から構造に依存した力動逸脱(分裂感情病症候群)を経て、構造の自立化(精神分裂症候群)へと至る構造力動連関のシフトと乖離であった。しかし、このような構造変化の上に力動の逸脱はなおも挿入した。さらに経過の一定の段階を過ぎると、疾病は継続しながらも構造力動連関は適度に再建し、症状全般の軽症化が認められた。

〔考察〕

構造力動論によって精神分裂症候群を諸水準に区別して演繹した結果、精神分裂病概念の範疇と次元とが明確化され、この概念の拡大解釈が制限された。この点において構造力動論は精神分裂病研究における共通の認識基盤を提供できる理論と評価した。症例での妄想現象のシフトと可変性については、構造力動論的解釈によって症状学的連続性が明らかにされたことから、本理論の実地臨床への応用可能性が確認できた。しかし、精神症状(構造)の生命性(力動)からの自立化それ自体の発生と回復の成因論については、構造力動論だけでは解明できない。この点を構造力動論の限界として問題提起とした。

〔結論〕

1. 精神分裂症候群を表題の 3 水準で再規定した結果、構造力動論は精神分裂病研究に対して共通の水準での認識基盤を提供できる理論と評価された。
2. 内因性精神病の長期経過例に照らして構造力動論

的に解釈した結果、構造力動連関の座標軸上で症状学的連続性が明らかにできた。構造力動論的方法論の従

来の精神分裂病解釈よりも優れた実地臨床への応用可能性を確認した。

論文審査の要旨

本論文の独自性は、第一に歴史的に拡大と縮小との間を揺れ動いてきた精神分裂病概念の範疇の見直しと、構造力動論を基礎にした疾病学、症状学、精神病理学の3水準での次元分析の試みを通して、輪郭の定まらない精神分裂病概念を論理的に再構築した点にある。第二は症状学的水準で規定された精神分裂病群を経過の一時期に示した初発以来40余年経過の内因性精神病の1症例を用いて、経過にみられた病像変遷に症状の連続性と内的連関を指摘し、構造と力動との連関の座標軸上で新たな意味づけを付与した点である。

このような観点からの長期に亙る詳細な知見に基づいての精神病理学的な病像経過分析はこれまでにない。加えて、変化と連続性を無視した恒常性のみ着目した従来の精神分裂病解釈に比して、構造力動論的方法論の優れた実地臨床への応用可能性を症例と通して実証した。本研究は精神病理学会でも高く評価されており、学問上臨床上、価値ある論文である。

主論文公表誌

構造力動論の精神病理学総論への寄与 第2部 構造力動論からみた精神分裂病症候群の諸水準—診断学的、症状学的そして精神病理学的水準での精神分裂病—

臨床精神病理雑誌 第22巻 第2号 147-162頁
(平成13年8月31日発表) 古城慶子

副論文公表誌

- 1) 構造力動論の精神病理学総論への寄与 第1部 構造力動論からみた主体と構造—Janzarikの顕勢抑止の概念について—。臨精病理 22(1):3-11 (2001) 古城慶子
- 2) 構造力動論の精神病理学総論への寄与 第3部 精神症状群の症状構成論的観点からの構造力動論—Birnbaum, K., 千谷七郎, Janzarik, W.の構造分析の視点—。臨精病理 22(3):201-218 (2001) 古城慶子
- 3) Cycloid psychotic features in delusions of perse-

cution from a Structural Dynamic Standpoint (構造力動論的立場からみた迫害妄想における類循環病像)。In: Endogenous Psychoses. Leonhard's Impact on Modern Psychiatry (Beckmann H, Neumärker K.J eds), 59-64頁 Ullstein Mosby 社発行, Berlin-Wiesbaden, (1995) 古城慶子

- 4) 慢性化病像における恋愛妄想主題の構造分析—陰性構造と観念情動性妄想作業との相互連関について—。臨精病理 19(2):157-162 (1998) 古城慶子
- 5) 最近の精神医学的症候学 II. 思考の異常—思路障害(自生思考, 思考途絶, 観念奔逸, 思考制止など)。臨精医 28(7):753-761 (1999) 古城慶子
- 6) Bonn大学基底症状評価尺度(BSABS)。精神診断 1(4):587-597 (1990) 古城慶子, 平澤伸一
- 7) 精神分裂病の縦断的研究からみた認知障害(BSABS)。精医研 11(1・2):172-185 (1998) 古城慶子, 平澤伸一, 加茂登志子, 他5名